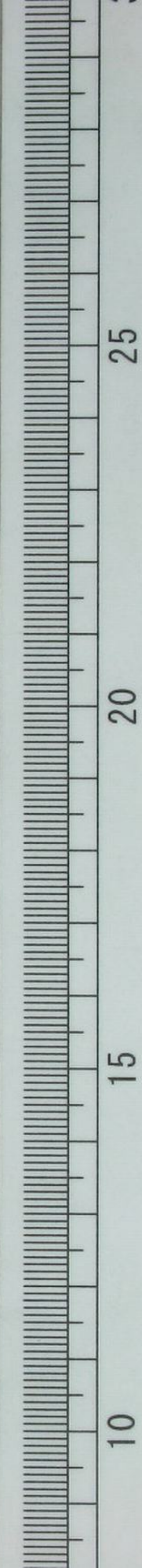


沼尻絳一郎編輯
西南太平記

五号
上



10

15

20

25

A434
7

沼尻絰一郎編輯全二冊

西南太平洋記

東京

萬笈閣發兌

48-7790

成血

業

羽異

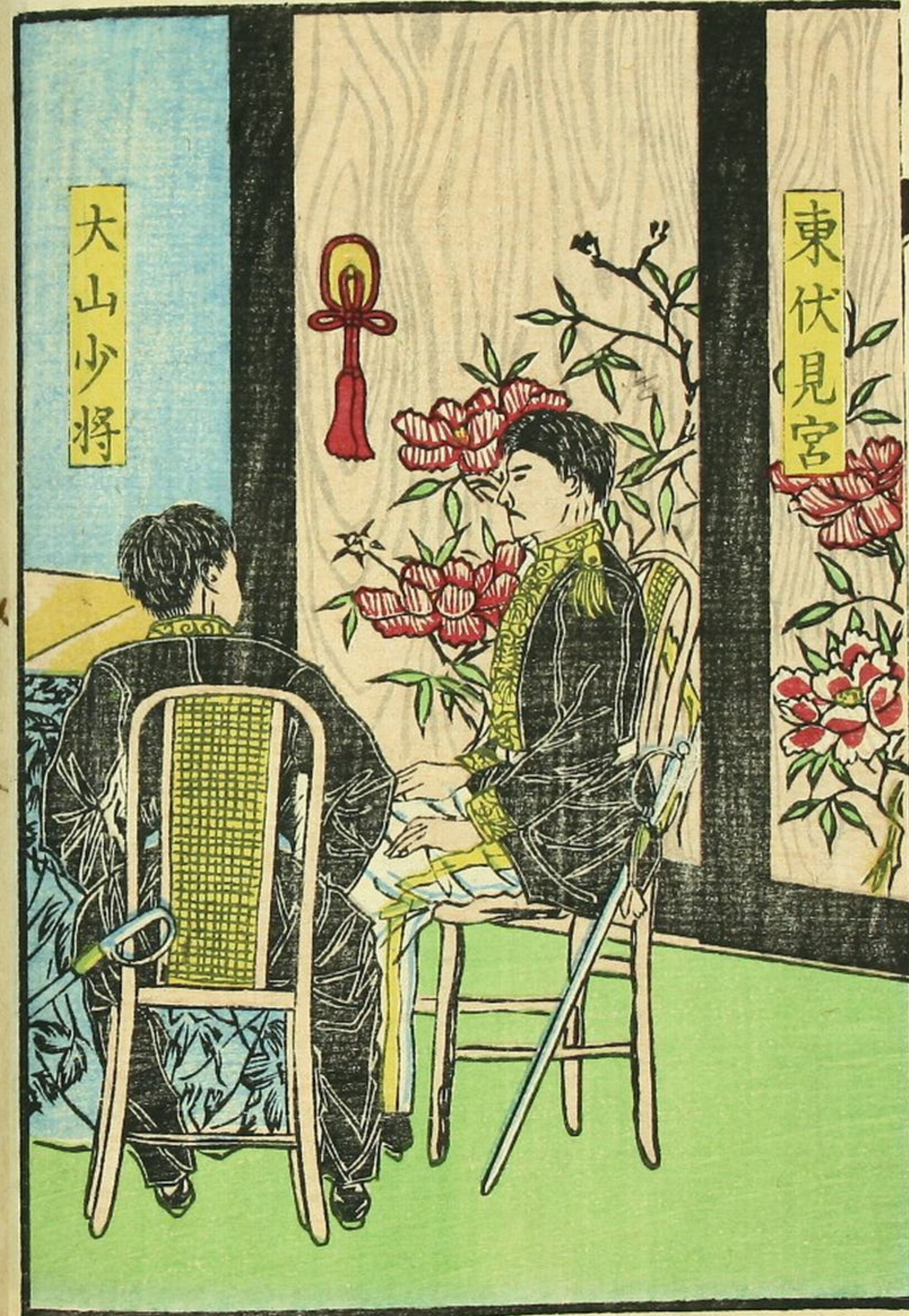
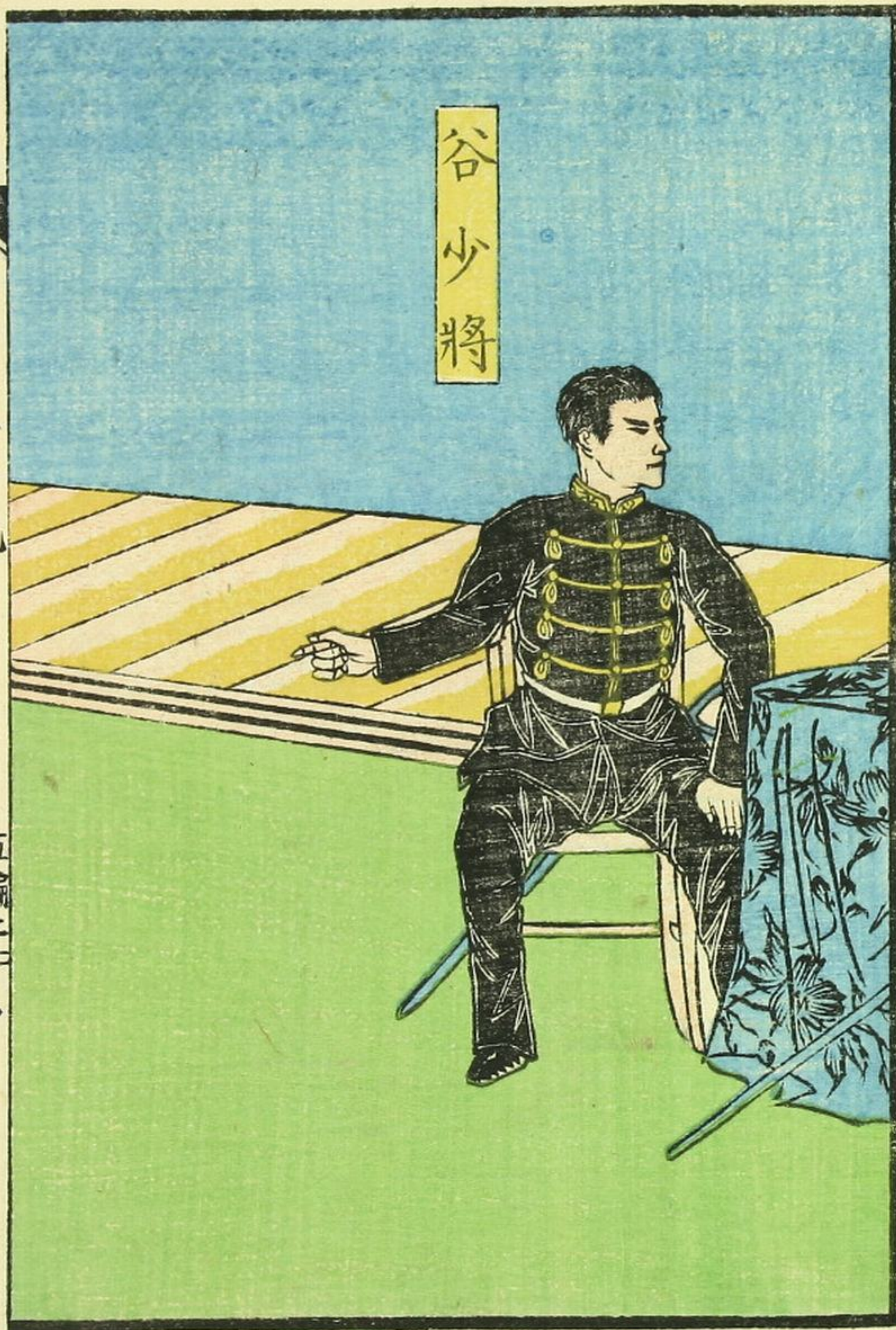
夫貝

海涯大夏錦書



西南太平洋

五編上二一



姊梶原二葉



妹小出操





陸軍中将西郷從道

西南太平洋記五編卷之上

東京 沼尻絰一郎編輯

第九回

山川中佐姉妹陸軍省へ建白
 前原一格先鋒奮戦す

夫れ鹿兒島の變動の天下の大亂にして政府の全
 力の大半と九州に傾け上へ國家の會計より下
 へ一般の商業金融に至るまゝ容易なるざる景響
 と及ぶにふ至る其兇焰の四方に蔓延するの事

たつと保つ可からず然らる佐賀熊本萩の叛乱を
以て鹿兒島黨を今日も孤立せし者も非ずと謂つ
べうらざらあり既に黒田參軍へ川尻より進撃せ
らるる由あり右ふ付龍驤艦へ至急鹿兒嶋に向て
出帆せり三月十九日川路大警視を陸軍少將兼大
警視に任せられ翌二十日征討別働隊第一旅團指
令長官仰付らるも諸も官軍へ過る十八日午前五時
より二重峠並に黒川口へ三手ふ分れて進軍し頗

る激戦たりしが賊軍臺場を據つて固守し攻落
すに能はざるが故に一先づ正午に至り戦を止め
たり時官軍死傷二十名餘ありたりとり廿日
午前五時より雨中を厭わずして官軍大に進撃し吉
次越え通ずる右翼と田原坂の本道たる左翼と双
方とも不守備兵を置き二股より進んで中央の街
道に攻撃し暫時の間へ大小砲を連發し黒烟を
冒して賊徒の鹿兒島人の刀の切味を知らしと計

り不無二無三一難立たれども官軍を益屈する色
 あり奮勇猛烈るる勢ひ不賊徒の僻易たりけ
 ん退いく臺場と固守するが由ふ未と之れを
 拔能はざまとも一壘を既不攻取りたを直ち不
 植木まで進撃一砲四門小銃二百挺計り分捕
 一火と植木不放ち敵の弾薬庫と焼たを焰炎天
 と焦一火粉風不迸りたりと翌二十一日木の葉の本
 陣と同所不移されり又山鹿口も速く進撃せ

んと専ら其の用意をなさるるとり同日川路
 陸軍少将へ山田少将と共長崎へ向けて進發せ
 られたり又華族戸田氏共公へ今般大垣の舊藩士
 族へ一通の説諭書と送られ騷擾事なきやう不
 注意の其文不
 聖上西京御駐輦不付天機伺として西上の
 途次故不舊邑と経過一親しく兄等と旧情
 と語るまことと喜ぶ幸ひ一言以て告ること

あらんとす目今西邊騷擾此際ふ乗ト不良
の徒無根の浮説と唱へ人心を鼓動せしめん
も計りがとく憂慮の至りあり實に恐る一人
の方向と誤るものありく 朝憲に觸るありと
き他年の勤勞も遂に灰燼に附まるのそる
らず汚名の東西に馳する所らんと今や臣
子の名分絶たりと 雖も情誼尚黙すべからず
願くは兄等の永く 朝意を遵守せんこと我
希望する所あり不盡

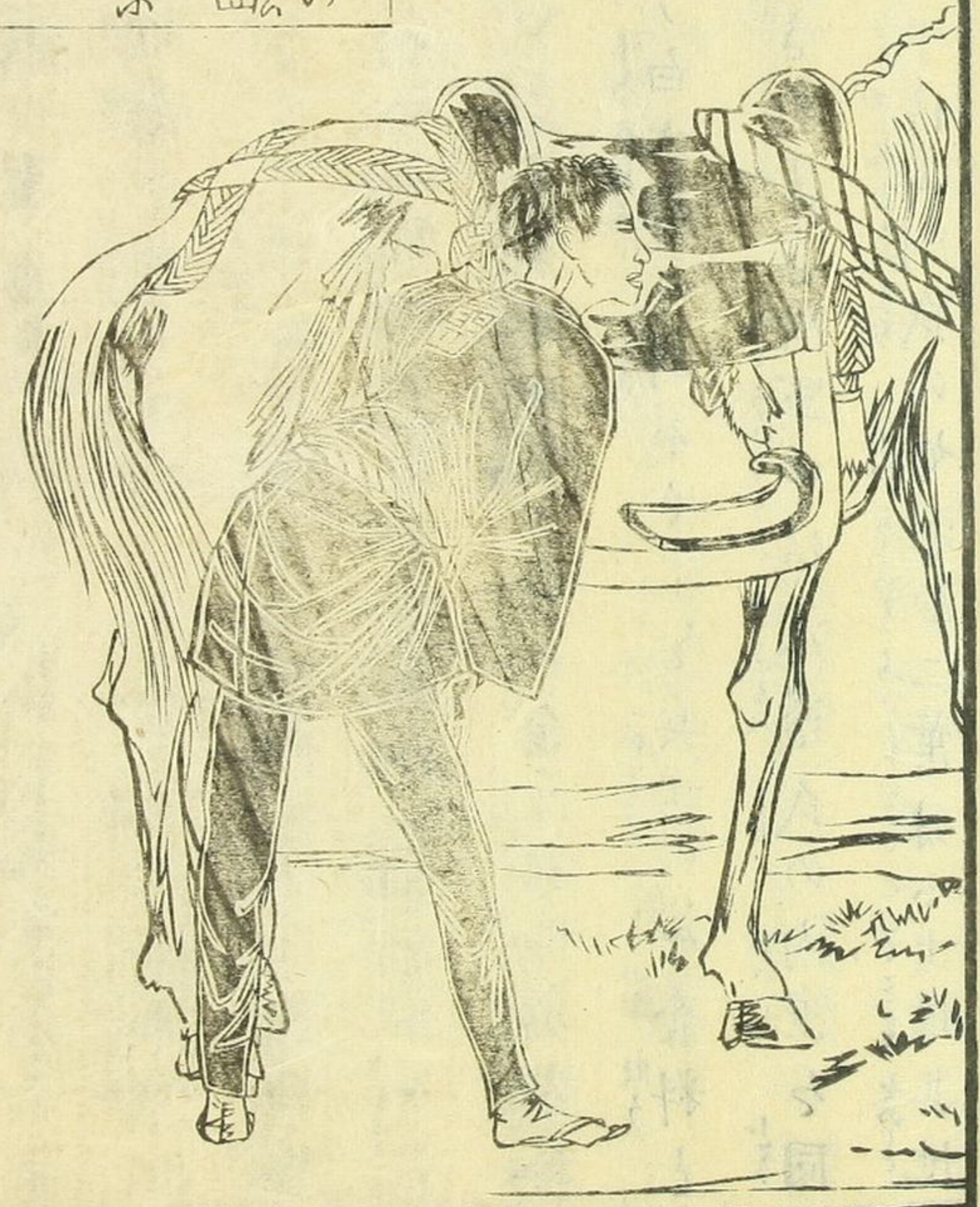
明治十年三月

戸田氏共

大垣諸兄

亦華族土井利恒公ハ此度の事件に付御用途の中
へ差加へらるる度と金千圓献納を願出られ其由を
堀田正倫公聞しめされ華族も追々献金願を出せ
し堀田正倫公奥方於精殿を願う烈女ありしが
勇膽を以て頭れ常不朝廷の為め大功を立すの

堀田家の
奥方屢西
國の事小
盡力す



西南太平記

五編上

西南太平記

志あり今般の事ありや大奮發ふく夜あけ主人よ
 り夜十二時過ぎ迄も勉強して五十反の白木綿と
 解と不ぐ一として戦地の官軍が怪我と一と者の療
 治に遣ふ為め不献納するとして家扶の女房や女中
 も俱とも力と盡つく一と夫堀田氏より金二百圓奥方於
 精まどのより白木綿の解と不ぐ一とと兵士の滋養料と
 して差出されまゝと陸軍中佐渡邊氏の内室を同
 勤まの陸軍中佐山川氏の姉梶原二葉妹小出操其他

同局の者より解と不ぐ一とと献納けんされたり

此木綿と解と不ぐ一とたる綿撒糸して病人の療
 治ちに必用の物あると晒木綿反物と一本いく
 解と不ぐ一と釜へ入いも糸へ粟と二合入れて粟の
 煮いと上に一たん乾くらせ夫と蒸籠へかけ
 蒸むまると長短も揃そろひ立り込こみ遣つをれる綿撒糸
 小成こるしつみべ

借かりも陸軍局りくぐんきやうにて渡邊陸軍中佐の内室と山川やまがわ浩ひろ

此入舊會津藩あり姉妹の兩婦人あり常小懇意
 あり一が又堀田家の奥方へ深く出入りて今般の事
 件も各々集り報國の為め一功と立る志あり
 女もぐるも屢盡力とるらん堀田正倫公奥方の俄
 馬上下り邸中と乘廻り家扶の女房ありひを
 奥女中と集め長刀とさうんりて西國の暴徒証
 討の御加勢も及ぶ勢ひあり戦地の怪我人の尽
 カハ云ふよ及むに奮發して朝廷へ夫正倫と

共み御忠節と盡す志一あり又陸軍中佐山川氏
 の姉二葉の本年三十二妹の廿六二人とも此の婦人
 達の會津藩の女ふり先年山川浩の佐賀の騷擾
 の時小重傷を負ひ平癒の後も不具の身体ありら
 れども勇氣の少くも衰へず此度の事件も二月
 二十六日長崎より乗船して八代口に向はき又妹
 操の夫小出氏も先年佐賀の騷擾出兵して討
 死したれば留守する身もとりあひら安きん

の多いのそり負傷も多く有るとの支と聞ふつけ
 も安閑と消日のを詮ふい支先年若松籠城ふ負
 傷の看護何くれと手掛と事も有るかゝり切め
 少一のお役も立のが當時の義務ぞと姉妹をト
 め七八人の婦人が心と一ツめ又賊徒の女隊も鹿
 兒島ふ沸騰せいとすくより猶も勇と立て各々
 朝廷へ大功と為すべいとて三月三十日陸軍省へ
 願書と持ぐいそたりハ奇特事有る事有りつる人

其願書の趣ハ左の通り

此度賊徒御征討ふつき活儀從軍中あら候へ
 ども何う御用相勤め御國恩不奉報度奉
 存候析柄此節負傷者多數有之趣傳承仕
 候固より其助ふおいて厚き御手當被為在
 候儀あらゆへども何卒戦地へ罷越右負傷
 者看護の御手助け仕り度御聞届け相成り
 候様只管奉願候方一御規則等も有之御差

許し不相成候へを其の他何成りとも相應の
御用被仰付度親族の者一同此段奉願候る
り

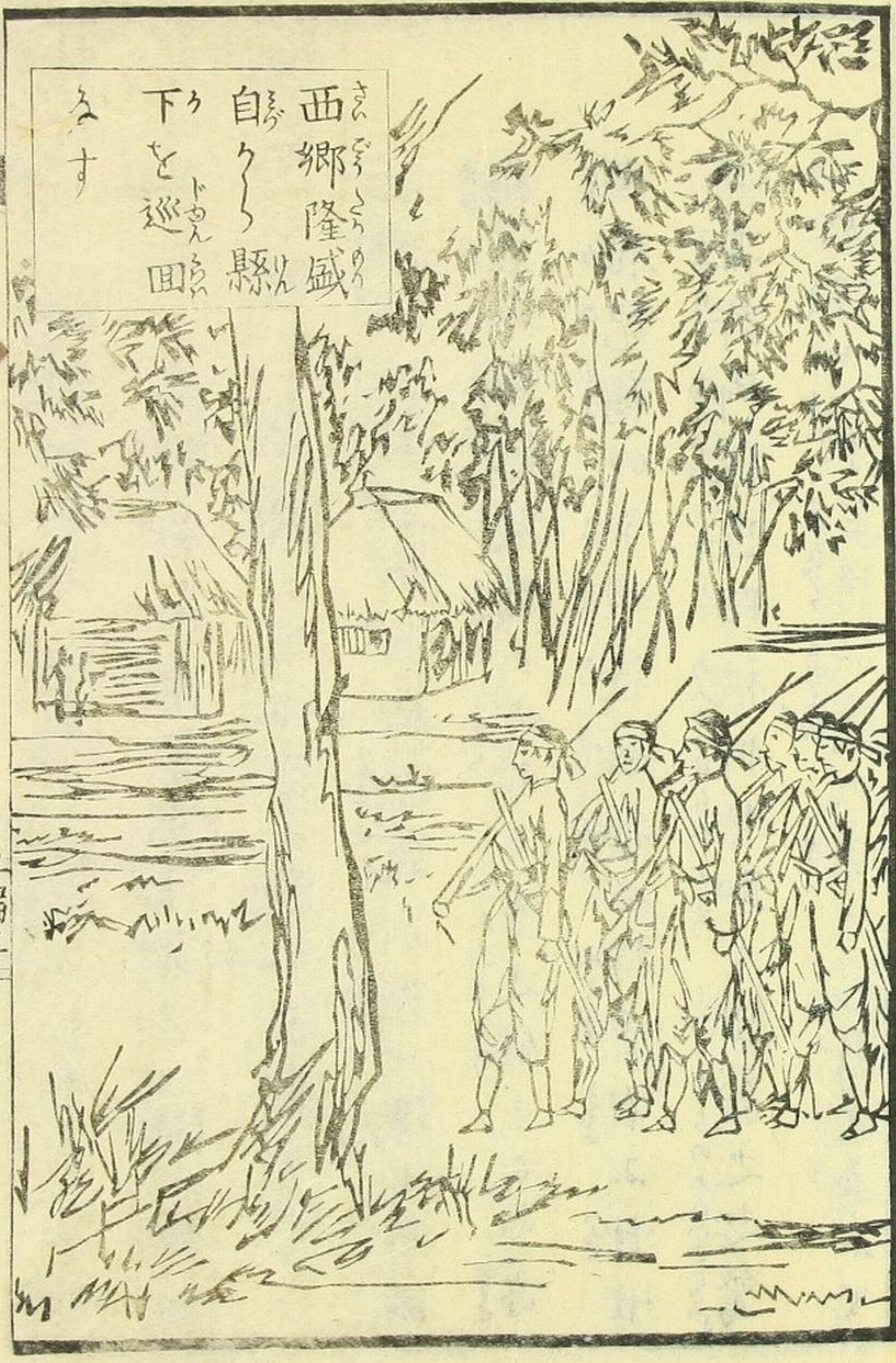
十年三月三十日
陸軍中佐山川浩妙
梶原二葉

同人妹
小出操

陸軍省宛

其の西婦人の常武藝と嗜と西國の騷擾と付
有志の者品物とさきぐらも多き中又西婦人の感

心のころさうる陸軍局も同志の婦人を加勢と
て戦地の事み盡力あり堀田家の奥方へも屢々出
入りせীগその前堀田家の奥を勤め吉沢祖兵
衛と呼者生國の信濃國水内郡山上條村方今長
野縣下ありその祖兵衛安治の常は角力と好
と強力無双の男ありと東京鎮臺騎兵隊第一大
隊第四小隊の一等卒の吉澤安治が去三月廿日
西國へ向けて出張を命ぜられ二月十八日



西南平記

五編上
十三



西南平記

故郷山上條村あり親祖兵工の許へそのよしを知
 らせむり一親祖兵衛より悴安治へ開き封の
 郵書を送り一が誠立立るる報知と見るべし
 去冬九州の悪徒等御誅戮以後に渾て静謐
 相成り都鄙鼓腹の心地あり有之候ところ亦
 々鹿兒島の不平徒騷擾の様子右ふ付廿
 日其許御隊出師被仰付即ち出發之趣驚
 入り候次第乍併此度の儀に容易之義みて

無之のよく出軍の上あつた粉骨碎身して
 第一ふ乍恐 聖慮と安んじ奉り二ツふら
 國家万民の為め力一丹心取も撓ず盡力專
 一ふ存候當方ふないても老人初々皆鐵石
 の思ひとあり乍陰心添いとう居り候間返す
 ぐへすも御國の為め家と忘れ親と忘れ唯々
 汚名と取らざるやう心腸不銘ト迅速徒軍
 の末無恙帰營又至らるを雀躍限りまらるべ

候先ハ陣中と恐れ不能長文候也

第三月廿五日

父

安治殿

尚以て當方の儀ハ決して無案事勤 王

一途不有之度候以上

右の趣堀田家ふても聞及び親吉澤祖兵衛の報知
誠不立込やりの挨拶あり安治ハ肥後口又向へ
といふ借も熊本城を賊軍の攻撃甚ど熾まりて

態と其一方を囲まざると又城中より味方への打
合せの若し事急なる時あつて狼煙を揚ぐるを以
て合圖と知るべしと蓋し城内を今日假令賊軍
明渡すとも決して官軍の兵氣を挫くお至る
まド然れを最早一方を切り破り植木口山鹿口
の官軍と合する様ニ評議一決するありべしと
思をるゝあり先頃款の賊徒ふて誅せらるゝ前
原一誠の弟同一格ハ危難の場を密に脱し何所

へり潜居ひそかにうりーが今般いまの役やくこそ時来ときりぬと西郷さいごう
 の黨とうふ組ぐみし先鋒せんぽう進すすみこ憤激げんげき突戦つせん狂惡きやうあくの働はたらき
 みり而しかも白布しろぬのふ我姓名わがせいめいを記しるし肩かたより勝かちをく
 掛け一と目めみりて敵てきふ知しられ戦争せんそう毎ごとふ必ず真ま
 先さきふ進すすんで屢戰場しばしばふ猛威もうゐを揮ふるふよぞ官兵くわんべいの此者このもの
 と目めづけ打取うちとらんと狙撃そげきすれども未いまと運命うんめい尽つぎ
 るよや今猶無事いまなほぶとふ頭あたまれたまを野津少將のづせうしやうの令弟おいてい
 野津中佐のづちゆうさの田原坂口のらざきぐちの参謀さんぼうふて争戦そうせんの度々たびたび真ま

先さきふ進すすみ兵士へいしを指揮しせらるる其勇猛實そのゆうめうじつふ目を
 驚おどろかむるりりりりり又西郷隆盛さいごうりゆうせいの本陣ほんじんと花岡
 山の麓ふもとるる北岡郷きたおかごうの北岡神社きたおかじんじやふ居自すまかみら乗馬のりうまふ
 て日々縣下あまがしと奔走ほんそうして諸軍しよぐんの進退しんたい馳引ちいき等らより
 人數にんずと募もるてとみ盡力じんりきする由よしあり又賊徒さくとの持論ちろん
 みの務つとめて敵てきを殺ころす勿なれと其故そのゆへの屍うばと乗越のりこるの
 銳威えいゐの避さけがと一唯彼ただかれを疵傷しとやうせしむるふあり
 何なにとるれを蠢うごみとる瘡者けがらと如何いかふ軍人ぐんじんと雖な

逆將前原
一 格先鋒
激戦す



も必ず戦友の之を介護するらん然るとんを
 自り隊伍と乱するりとして常ふ必ず營外へ出さ
 ず又三月二十日陸軍省より第六軍管を除ひて
 鎮臺府縣へ達せらるると左の通り

辛未秋四鎮臺と被置候節舊藩々ヨリ召
 集兵解隊後賞典米下賜之者今般詮議之
 次第有之悉皆召募候條各府縣下之者左
 記之箇所へ夫々急速参着可為致此旨相

達候事但し現今他管へ寄留ノ者ハ其寄留先
 府縣ノ者召募ノ地へ直ニ参着可為致尤旅費
 之儀ハ後備軍召集之通相心得各府縣ニ於テ
 一時繰替相渡追テ可下渡事

- 第一軍管
- 第二軍管
- 第三軍管 管下府縣之者
- 第四軍管
- 第五軍管

右東京鎮臺大坂鎮臺へ

名古屋鎮臺の司令長官四條少將の大坂表へ出張
 ありしに付大坂臺下警備向の指揮と承任せられ
 岩村四等判事ハ鹿兒島縣令に任ぜられたり此処
 堺縣士族田邊藩頗る銃砲の達人と木村氏が一
 中隊募られて戦地へ出張と又備中の國賀陽
 郡真金村の平民ハ常小一村中擊劔を好し中ふも
 頭立岸本力三郎浅沼栄三郎藤原延文武南東一
 郎藤井真佐志の五人あり各革具足と着て勇を進

んで上京し五人の連印にて國恩と報づる為上申し
 今回西南賊徒の征討御用と仰せ付られ又鹿兒島の暴
 徒ハ万死を極め数ヶ所へ手配し一過三日ハ吉次越よて
 戦死したる賊將篠原國幹ハ確實と高島大佐が聞届
 したる又去る十七日官軍ハ賊壘を離る僅三四間の
 所迫進とたるに賊徒ハ頻る白刃と打振縦横ハ切廻り
 ける官軍邀撃し大に激戦したれと終ひ之と拔と
 能かりしと高島大佐の一大隊半と巡查七百名ハ同十八日

午前五時半は長崎と発艦一八代へ向ひ残る一大隊半と
 巡査五百名の宇土より進撃し賊の後を衝の策みて
 仁禮大佐の高橋近邊を乗廻り日奈久の南須口村へ
 上陸し折しも濱風烈く鯨の聲遙く聞へける故望遠鏡
 みて之を見れば賊軍凡三小隊計り屯集しけし官軍
 之を攻撃せんとする一支部も支へずして散乱す
 午後三時進んで八代に着陣し同所の士族の動静
 と探偵するは一同大義を守り且官軍を告るは今

や賊高瀬口の防禦小力と尽し十九日當地の警備甚薄
 一とあり又翌廿日宮原鏡町の両所へ兵を進めたり官
 軍の植木と取て向坂に進撃し大小砲を以て連発す小
 砲声空を曳き恰も霹靂の碎る如く賊軍之に應撃
 し午變万化黒烟の中を潜り白刃を閃し切込とせれど
 官軍の更ともせむ奮撃突戦しけるが終に賊徒の官
 軍の勢小敵しごとく引退きし官軍勇を進で向坂と
 取切する程に賊徒の黄昏の鐘を合圖し散乱しけるは又

賊徒ぞうと俄まに備そまを立た直ちし山鹿やまがの方かたより攻せめ寄よ烈れつしく其その側そば
 面めんを突つ鼓こ躁そうし進しん撃げきしたじうの流なが石いしの官軍くわんぐんも止とを
 得えずして植うゑ木き迫せま引ひ上あげたりしが同どう廿に一日いちにちの曉あけより大おほ雨あめ
 と冒かして官軍くわんぐん山鹿やまがと攻せめ撃げきし一いつ歩ふも退ひくと奮ふん戦せんす其その
 勢いきひ最いと盛さかんるりとす

西南太平記五編卷之上 終

010190507640

